

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

「もの」の人類学的研究(2)(人間/非人間のダイナミクス)2014年度第3回研究会(通算第3回)

日時:2014年12月14日(日)14:00-19:00

場所:AA研マルチメディアセミナー室(306)

吉田ゆか子(AA研共同研究員,国立民族学博物館)

「複製がつむぐ天女の舞 - インドネシア・バリ島の事例から」

中村美知夫(AA研共同研究員,京都大学)

「動物は「非」人間か?—「人間・動物・もの」に関する一考察」

複製がつむぐ天女の舞 - インドネシア・バリ島の事例から

発表者 吉田ゆか子

本研究は、バリ島ケテウェル村のパヨガン・アグン寺院(以下P寺院)に伝わる天女の舞において、ご神体の仮面とそのレプリカが場面ごとに使い分けられている状況、特にレプリカの真正性と非神聖、神聖と世俗が、人々、そしてオリジナルとの関係の中でたち現れたり、揺らいだりする姿に焦点化した。

天女の舞の上演を人々は「天女様がお踊りになる」「天女様がお出になる」と表現する。(人間が仮面を使用し踊るのではなく)天女が人間の体を借りて踊るのである。舞と仮面の起源は共に非常に古いとされ、高度に神聖化されてもいる。バリ舞踊の代表的演目「レゴン」のルーツともいわれるこの演目は、バリ芸能の中でも特別な価値が置かれている。

天女の舞が1988年に芸術祭に招待された際、寺院側は、神聖な仮面が世俗の上演によって「汚染」される事を恐れ、レプリカを作成しこちらで代用した。しかし、後述するように、儀礼用のオリジナル、世俗の上演用の代用品、といった図式には還元不可能な事態が進行している。先行研究は、天女の舞の歴史性や神聖性を強調する一方、レプリカの仮面についてまとまった分析をしてこなかった。本研究は、代用品として生み出されたこの仮面が纏う曖昧な意味合い、そしてそれが天女の舞や人々に与える影響を考察する。

1988年の芸術祭の後、この仮面が必要とされる世俗の上演機会はそれほど多くなかった。他方、仮面をしまわれたままにしておくのは「可哀想」だ、としてP寺院の周年祭で、レプリカも舞に用いるようになった。P寺院の僧侶や踊り子、伴奏者たちは、次第にレプリカを「子天女様」と呼び、オリジナルの方を「大天女様」と呼ぶようになった。

ただし、P寺院を離れば、仮面が「親・子」であると捉えている者は少ない。P寺院の僧侶も、P寺院外で子天女様を儀礼に登場させることはなく、特に公的な場では、仮面を「レプリカの天女様」と呼ぶ。バリ州政府は神聖な仮面を儀礼以外で用いることを禁止している。僧侶のこの二重規範ともとれる扱いは、子天女様が(レプリカとして)世俗の舞台へ

と出向くことを可能にしている。

今回の発表では、レプリカの仮面の主要な働きを4点指摘した：

(1) 新しい創作。レプリカを作成した職人は、その後天女をモチーフとしたいくつもの仮面を創作している。

(2) 新たな撮影記録。例外はあるものの、基本的にP寺院は天女様の撮影を禁止しており、それがこの演目や仮面の神聖さを印象づける要素となってきた。一方、レプリカの仮面はより自由な撮影が許されており、カメラの前で裏返されるなど、支配的で分析的な視線の対象となっている。

(3) 上演機会の拡大。当初の村民たちの目論見通り、レプリカの存在により世俗の舞台での上演が可能となった。特にバリ芸術祭は、バリ芸能の華の認定装置といった意味合いがある。他ジャンルとの共演も経て、天女の舞は加工可能な「バリ文化」、ひいては「インドネシア文化」の素材となった。

(4) 天女様あるいはオリジナルの神聖さと魅力の強調。先行研究は、複製という行為が必ずしもオリジナルの価値を低下させないこと、そしてむしろ複製物に媒介されイメージが流通し、権威づけられ、名作が生まれることを指摘してきた。天女の仮面の場合も「レプリカを作られるほどに重要である」として、オリジナルの価値はむしろ強調される。また、レプリカの存在は、オリジナルが高度に神聖である証、そして世俗の上演で穢されていない証ともなる。また、子天女様が舞う際には、大天女様の力添えを得るための手続きがなされているため、子天女様の神聖性や魅力は、大天女様の力の現れとして捉えられる。ただしレプリカ／子天女様が舞う際に、これをオリジナル／大天女様であると誤解して眺める人々が相当数いる。そのため、オリジナル／大天女様は「芸術祭へも持ち出せる程度の神聖さ」しかない、という理解を生んでしまう可能性が潜在的にはある。

しかし少なくとも2007年の芸術祭ではこのようなことは起きていなかった。踊り手の念入りの祈りや厳かな仮面の取り扱いがそのまま舞台に上げられ、会場はひと時儀礼空間のような様相を見せた。ここに、文脈によって仮面が選ばれるのではあるが、その仮面自体が文脈を変えてゆくという仮面の動的な側面をみることもできる。当時の僧侶は、まるでオリジナルのような表情を見せたレプリカの姿に「驚いた」とコメントしている。

レプリカは、オリジナルや人々との関わりの中で、意味づけられ、配置される。しかし逆に、大天女様の威信やイメージを子天女様が支える場面がある。また、それは時に人々の当初の見込みを超えたものとなる。レプリカ／子天女様の曖昧さ、多義性ゆえに、世俗の上演にさえ、神々しい魅力が添えられている。

## 動物は「非」人間か？—「人間・動物・もの」に関する一考察

中村美知夫

京都大学野生動物研究センター

### 「非人間」について

まず、タンザニアで野生チンパンジーの研究をしている立場から、本研究会のサブタイトルである「人間／非人間のダイナミクス」における「非人間」という語について若干の考察をおこなった。この語は「もの」をたんなる「客体」として扱わず、狭義の物質文化研究の境界を超えるために設定されたものであるが、その語感の悪さは否めない。

人間と非・人間(nonhuman)のペアはラトゥール科学論でも重要な概念となっており、非・人間には科学の現場でさまざまな形で研究者(=人間)と関わる多数のアクタントが含まれている。しかしながら、ラトゥール自身も動物が道具を使うようなケース(動物—道具)を、人間が道具を使うケース(人間—道具)と平行に考えており、こうした例は明らかに「人間—非・人間」という構図だけでは把握しきれない。動物の観点から「人間／非人間」を考えた場合、それは人間にとっての対象動物という側面(人間—動物)と、動物にとっての対象の「もの」(動物—「もの」)のいずれにも読み替えられる。以下ではそれぞれの側面について検討をおこなった。

### 人間—動物

「人間／動物」という区分自体がそもそも不明瞭さを孕んでいる。当たり前だが、生物学的には人間も動物であるし、学名に見る「人間 *Homo*」の範囲は時代とともに大きな変遷をたどってきた。かつて有色人種を人間と動物の中間的な存在と見る人々がいたし、逆に類人猿などの動物に「権利」を認めるといった動きもある。

近年、人類学においても、動物に人間と同等のエイジェンシーを認めるといった動きがあるが、現時点ではあくまで対象人間側の述べる人間にとっての動物のエイジェンシーといった側面が強いように思える。人間と動物との関わりを理解する上では、人間側と動物側双方の観察を積み重ねる必要がある。その場合、記述者は常に人間側であるという、不可避免的に非対称な状況であることには自覚的であるべきであろう。

### 動物—「もの」

動物と「もの」との関わりについて有名なのは、霊長類をはじめとしたさまざまな動物による道具使用であろう。動物の研究者も、道具使用のような人間的知性の枠組みの中で解釈可能な行動にはとくに興味を持ち、詳細な記載をおこなってきた。一方、道具以外の「もの」の操作については、それほど体系だった記述がなされていない。本発

表では、チンパンジーにおけるそうした道具使用以外の「もの」の操作の例についても、若干の事例を示した。「遊び」とか「意味不明な行動」と思われてきた物体操作の中にも、動物が「もの」とどのように関わっているか、動物が「もの」をどのように認識しているのかを探るヒントがあるのかもしれない。

## 考察

「もの」がエージェンシーを帯びて働きかけてくる場合と、動物が実際に働きかけてくる場合とは違いがあるように思える。動物は人間ではないが、具体的な動きや働きかけを観察可能な、身体を持った存在である。「科学」的対象として扱う限りにおいて、動物は単なる客体である。ただし、それは人間が対象の場合も同様である。一方、動物をたんなる客体以上のものとして扱う場合、短絡的に「人間」のような(もしくは亜人間的な?)主体として扱えばよいのか、といえ、それも問題がありそうである。

最後に「動物と『もの』の関わり」と「人間と『もの』の関わり」との比較可能性について検討した。人々が日常的に、当たり前に関わり合う身近な「もの」(たとえば食べ物や即興的に用いる道具など)についてであれば、もっと人間と動物の間での比較が可能になろうと思う。人間における「もの」との関わりに、文化による多様性があるのは分かるのだが、そうした中に共通性は抽出できないものだろうか。たとえば、エージェンシーを帯びる(帯びやすい)「もの」には何らかの文化を超えた共通点はないのだろうか。

チンパンジーが興味を示す「もの」を概観すると、目や顔のような形状をもつ「もの」、人工物(制作者を想起させる「もの」)、動物(およびその派生物)、運搬・操作可能な「もの」、などにバイアスがかかっているようにも思える。こうしたバイアスは、人間がエージェンシーを見いだす「もの」とも共通している可能性があり、今後より詳細な検討が可能かもしれない。